「イエスもまた同じように」
ヘブル人への手紙２：１４－１５
December.22.2024

ヘブル人への手紙２：１４－１５（パワポ）

Preface

所謂、科学主義、または無神論という観点から見たこの世界・宇宙は、物質でしかありません。
実際のところ、どうなのかよく分かりませんが、人間が見たことも行ったこともない推定１３７億年という途方もない歳月によって成ったというこの宇宙は、偶然の産物に過ぎないと言われます。

たまたま何かの物質が存在し、そのたまたま存在した物質に何かが起こり、起こった何かによって、何か良く分からないまた新たな物質が生まれ、物質同士くっ付いたり、引っ付いたり、離れたり、壊しあったりして何だか良く分からない壮大な物質世界が存在するようになったと考えます。
そこに、人格的な何か、意志とか、意図とか、目的とか、価値観などの入る余地はありません。

でもおかしなことにと言いましょうか、皮肉なことに、または矛盾したことに、その偶発的なことが重なって出来た、思いも、考えも、意志も、意図も、目的も、価値もない偶然の産物に対して、人格を持った人間は、そこに意味を求めようとします。
「何か答えのようなものがあるはずだ」と、「あーでもない、こうでもない」と、探求します。
偶然の産物。意志もなければ、意図もないところに、「何かがあるはずだ」と、神が目的をもってお造りになったゆえでしょうか、人間は本能的に、そのただの物質の集合体のような世界に、人格的な何かを求めてしまいます。

そして聖書は、その答えを、至って明快に、端的に教えてくれます。
「初めに、神が天と地を創造した。」

この世界は、偶然の産物などではなく、しっかりとした意図と目的をもって設計され、デザインされ、造られたものである。
しかも、目に見える物質世界だけでなく、目に見えるものの背景に、その裏側に、土台に、見えないけれども見えるものよりも確かで、決して無くなることのない「天」と称される確かな世界がある。
そして、その造られたすべてのものの上に立つ、意図や思いや価値や意味を求める人格・品性をお持ちの超自然なるお方がいらっしゃる。
「万物の存在の目的であり、また原因でもある神」がおられる。

「この方を知らずして、この世界を真に知ることも出来なければ、自分が何者なのかも知ることも出来ない」と、「どんなに探究したとしても、空を打つようなことに、結局のところ帰着してしまう」と、「なぜ、この事実を認めようとしないのですか？　なぜ、それが分からないのですか？　なぜ、見えないのですか？　なぜ、感じないのですか？　なぜ、素直になれないのですか？　なぜ、矛盾を貫こうとするのですか？」と、２０００年以上も掛けてこんな分厚い言葉を神は語り掛けて下さり、偶然の物質世界の極みだと唱えられている２１世紀という時代に生きる私たちにも、語り掛けて下さっています。

Part One

私たちは、人間という生き物で、私たち人間は物質で出来ていますが、考えを持たず、意志を持たず、目的を持たず、価値を求めない非人格的な無機質な産物ではなく、人格があります。

価値を求め、目的を探し、生きているといういのちの実感を欲します。

精子と卵子が合わさって人は生まれてきますが、精子も卵子もＤＮＡという遺伝情報の伝達物で、その遺伝情報もアデニン、グアニン、シトシン、チミンという物質の羅列でしかありません。

でも不思議なことに、物質と物質が出会い合わさっただけなのに、そこに、考えや思いや意思や意図を持ついのちという人格が生まれます。

とても不思議なことだと思います。

人は死んだら土のちりに帰りますが、私たち人間が、どんなにちりという物質とちりという物質を混ぜ合わせ、掛け合わせ、足し合わせたとしても、そこに命という人格は生まれてきません。

こんな形にもならないですね。

聖書は、物質と物質の掛け合わせ、足し合わせ、混ぜ合わせの中に、いのちという人格が生まれることを、神の創造、神の御手のわざと言います。

もっと詳細に言いますと、「大地のちりで形造ったその物質の塊に、神がいのちの息を吹き込んで下さったために、人は生きるものとなった」と聖書は教えてくれます。

つまり人とは、

「生き物」ではなく、「息もの」（パワポ）

だということですね。

私も今回、このメッセージ準備をしながら、心新たに気付かされた気が致します。

「ああ、人は生物、生き物ではなく、神の息によって、いのちという人格を与えられた『息もの』なんだ！」と気付かされました。

「この世界は、意味もなく、目的もなく、人格もなく、行く当てもなく、何だか良く分からない水面をただ漂っているだけの無機質な物質世界ではなく、『息』（いのちの息）という神の意図によって成っている世界、人なんだ」ということを聖書は教えてくれます。

でも、この事実を認めさせたくない悪魔という死の力を持つ輩に魅力を感じてしまい、神なき、意図なき、意味なき偶然の産物という答えもなく、取り留めもなく、救いもなく、いのちもない嘘に捕らわれてしまった人類は、迷う者となってしまいました。

神という必然なるお方を忘れ、偶然の産物という恐れと暗闇の中で悶え、呻き、光を見出せず、道を失ってしまった。

道を失ってしまっていることが常態化し、道を失っていることにも気付けない。

イエス様が仰った、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父なる神のみもとに行くことはできません」という、人が人格といういのちを持っていることを正しく自覚出来る道を失ってしまい、道ではないものを道であると唱えながら争い、戦い、競争し、奪い、奪われ、占領しという暗闇を繰り返してしまう。

２０００年前にイエス様がお生まれになった世界も、正に、人が道を見失ってしまった結果、作り上げてしまった暗闇の世界を良く表している世界でした。

Part Two

先週の聖書箇所になりますが、もう一度見てみたいと思います。

ルカの福音書２：１－７（パワポ）

ローマ皇帝アウグストゥスから、「住民登録をせよ」という勅令が出たという記述から、私たちが決して見落とすことが出来ない、正に暗闇のような悲惨な事実、環境、状況があることを教えられます。

それは、この当時、イスラエルという国、イスラエルという民、ユダヤという国、ユダヤという民は、二重支配の中を生きなければならなかったということです。

今ここの箇所では、皇帝アウグストゥスが登場してきますが、同じルカの福音書１：５には、「ユダヤの王、ヘロデの時代に」という言葉が出てきます。

つまり、ローマという大帝国が世界を支配していた中、イスラエル・ユダヤというその支配の中の一地方でしかなかったところを、イスラエル人ではない王を立てて、その者にイスラエルをユダヤを統治させ、支配させていたということです。

一人の主人に仕えるだけでも大変なことなのに、二人の主人に仕えなければならなかった。

自分たちの土地や民族性や所有などが、尊重されるような余地は一切ない。
しかも、「住民登録せよ」というのは、税金と軍隊が目的ですね。
１日三食どころか、１日二食一食食べるだけでも大変な中、徹底した重い税金・年貢をしっかりと徴収される。
二重支配なので、二重に徴収される。
さらには、軍隊に従事できる男の数をしっかりと把握し、いつでも徴兵できるようにしておく。
「お国のために、皇帝のために、王のために」という名分にもならない名分のようなものために、自分の体と命を差し出さなければならないということです。

住民登録は、搾取と暴力を前提にしたものでありました。
旧約聖書を見ますと、ダビデ王が人口調査と住民登録をした時、神さまがダビデに、「お前は王となって、人々を搾取し、暴力の道具としようとしているのか！」と激しくお怒りになられたことがありましたが、当然の怒りですね。

ヨセフとマリアは、自分たちが搾取されることに、暴力に加担させられることに致し方なく協力し肩入れしに、ヨセフの本籍地ベツレヘムへと向かいました。
抗うなんていうことさえも思いもつかないような弱い立場、境遇です。
「こっちに行け」と言われれば行き、「あっちへ行け」と言われれば行き、「財布を広げろ、ポケットにあるものを出せ」と言われれば、出さなければならないような境遇、立場、時代。
暗い時代。暗闇の時代。何の希望もない状況。
さらに、そんな状況に置かれたことを恨んでしまうかのような、身重になっている愛する妻を丁重にもてなすことも出来ない、生まれて来る赤ん坊に対して、親として最低限整えてあげたいと思うことさえも出来ない情けなさ。

しかし、しかしです。
言葉に出来ないそのしがないわびしいところこそが、神の意図であり、イエス様の望むところであり、そこでなければならなかった、そういう中だからこそ、すべての人への神のいつくしみとあわれみと愛の深さ、高さ、広さ、長さをじんわりと知ってもらえる。
そこに意味がないのではなく、目的がないのでもなく、価値がないのでもなく、無機質な偶然の産物でもなく、必ずやそうしなければならないという必然の、人格的な意図を持った神の意思の表れの骨頂が、そんな時代に、そんな境遇に、そんな状況にお生まれなさった主イエス・キリストです。

「この世界は、偶然の産物などではない」という天地万物をお造りになられた主なる神様の高らかな宣言の現われです。
「あなたがたは、私の宝である」という神の意思の現われです。
神の息を失って、渇ききった、息苦しい、今にも気を失いそうになって目の前が暗くなっている暗闇の中に、もう一度、神の息を吹きかけて下さるかのように、

イエス様はお生まれになりました。
　しかも、そのお生まれなさった姿は、赤ん坊という弱い姿、飼葉桶という弱いところ。
　でも、その弱さが人を生かしました。
　まず、ヨセフとマリアという弱い一組の夫婦を生かしました。
　「ヨセフよ、マリアよ。その弱さの中にわたしもいるし、その弱さの中に、輝く希望がある」と、神が身をもって示して下さいました。

　ルカの福音書の著者ルカは、何の希望もない暗闇のような状況の中に、物凄い１節を書き入れます。

ルカの福音書２：４（パワポ）

　「あっちへ行け」と言われればあっちへ行き、「こっちへ行け」と言われればこっちへ行き、「財布を広げろ」と言われれば財布を広げなければならないようなこの暗闇の現状の中に、「ヨセフは、イスラエルの歴史の中に燦然と輝くダビデ王の家系であり、『そのダビデから救い主がお生まれになる』という神の約束の成就が今、ヨセフの身の上になっているんだ」と語るのです。
　ヨセフとマリアの目の前に広がっている、神を忘れた偶然の産物と化した獣のような厳しい世界の中に、しっかりと神の意図が、神の目的が、神のいのちが着実に進んでいるということを教えてくれます。

　「私たちの目には暗闇でしかないような状況にも、神の意図がしっかりと働いておられる。　神のご計画がある。　神を信じて生きることを諦めちゃいけないよ！　神を見上げることを忘れちゃいけないよ！　大丈夫。その苦しみ、主イエスという赤ん坊のお姿をもってお生まれになった神なるお方は、隅々までちゃんと分かっておられるし、理解しておられるし、知っておられるから、大丈夫。神が統べ治めておられる摂理の中に、この世界はあるから」と、語っておられるように感じます。

Part Three

　イエス様は正に、今日の聖書箇所ヘブル書にある通りに、明確な意図をもってお生まれ下さいました。

ヘブル人への手紙２：１４（パワポ）

　「子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。」
　私たち道を失った者たちのことを「子たち」と言います。

　苦しんでいる子どもの姿を見ること以上に苦しいことは、親にとってないで

しょう。
　変わってやりたいけれども変わってやれない。
　でもイエス様は、「イエスもまた同じように」と記されている通り、血と肉という情けなくて、わびしくて、しがないものをお持ちになって、神が人となって、しかも弱い赤ん坊となってお生まれになりました。

ヘブル人への手紙２：１７－１８（パワポ）

　イエス様は、「すべての点において私たちと同じようにならなければならなかった」と言います。
　なぜか？
　そのイエス様の弱さが、私たちを生かすからです。

　９月にまきばフリースクールの武田和浩先生が来て下さってお話しして下さいましたが、「あれさえなければ」と痛み、苦しみ、不幸に思い、困難だったその弱さが、自分が痛んだからこそ、相手の気持ちが分かる。
　分かってもらった相手も喜ぶ。
　そう思えた瞬間、その弱さは価値に変わり、益に変わります。

　まきばで運営しているデイサービスをご利用されておられる方の中には、認知症で意図せず人に危害を加えてしまう方々もいらっしゃり、出産したばかりの職員が生まれたんばかりの赤ちゃんを連れて出勤すると、その赤ちゃんのところにそのご利用者さんたちが近づいて行き、びくびくしながら見ていると、その赤ちゃんを囲んでみんなニコニコしている。
　職員も、ご利用者さんたちも、みんな笑顔になっている。
　何にも出来ない、無力な弱い赤ちゃん一人が、１０人の大人をあやしている。

　イエス様はこんな弱さを通して、温かく、私たちを生かすために無力な赤ん坊の姿をお持ちになってこの地に来て下さいました。
　本来ある神の荘厳さの前に怖気づき、打ちひしがれて、その強さの前に圧倒されて終わってしまわないように。
　「強さこそ、この世界には必要なんだ」という間違いを繰り返させないために、その間違いを正すために、弱い私たちと同じようになられました。
　そして、そうしてイエス様の弱さに生かされた私たちが、またその弱さをもって、他者を生かすことを期待して、弱い私たちと同じようになられました。

　偶然の産物と唱える世界は、弱肉強食、適者生存、自然淘汰という強さを誇り、強さを蓄えようとしますが、強さは世界を変えることも出来なければ、人を変えることも出来ません。
　イエス様は、この大切なことを教えて下さいました。
　そして、その教えを真っ向から間違っていると宣い、ねじ曲げ、人々を強くな

ければ死んでしまうという死の恐怖によって束縛し、一生涯死に抗うことだけに集中させる死の奴隷として人をつないでいる悪魔のわざを断ち切り、子たちである私たちを死から解放して下さいました。

ヘブル人への手紙２：１４－１５（パワポ）

イエス様は、私たちと同じようにという意志と、私たちのために死ぬという目的と、その死によって悪魔を滅ぼすという裁きと、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を開放するという救いのために、お生まれ下さいました。
偶然の出来事ではなく、着々と進められてきた必然の神のわざとして、イエス様は、この地にお生まれになりました。

Conclusion

今も、神さまのわざ、ご計画、目的、意図、意思はなされております。
誰が何と言おうと、私たちがどう思おうと、私たちの境遇や条件や痛みや苦しみや弱さが、それを疑ってしまおうとも、神は生きて働かれておられます。

偶然などという悪魔のささやきなど一切入る余地はなく、神の必然が成されているのみだと、聖書は語って下さいます。

神の意図、目的、思い、価値、意味を見失わず、諦めず、信じ抜く私たちでありたいと願います。
たとえ見失い、諦め、信じ抜けないと思ったとしても、その弱さの中に神は働いておられることを思い出せるよう神のあわれみを願います。

イエス様が、弱い無力な赤ん坊の姿というこれ以上ない低いところにお生まれ下さったという事実にこそ、まことの希望があり、光があったんだということを、このクリスマスの時期に今一度心に刻みながら、私たちの日々の現実の中にも、その光を見出し、思い出し、信じて歩んで行きたいと思うものです。

お祈りいたします。
祝祷：ヘブル２：１４－１５